

第57回 試験研究成果発表会（作物）発表概要

【日時】令和2年1月29日（水）9：30～16：30

【会場】千葉県立 東部図書館 研修室（旭市ハの349）

発表1 成果発表（9：40～10：05）

甘い「Qなっつ（千葉 P114 号）」を安定して生産する技術

落花生研究室

黒田 幸浩

甘みが強く、外観に優れた落花生「Qなっつ（千葉 P114 号）」は平成 30 年から一般栽培が開始されておりますが、圃場によっては枝が長いために収穫作業性が悪かったり、ショ糖含有率が安定しない事例が確認されています。今回は「Qなっつ」の特長である高いショ糖含有率を安定して発揮させる栽培方法とともに、収穫作業性の改善方法についても併せてご紹介します。



「Qなっつ」を用いた商品

発表2 成果発表（10：05～10：30）

圃場内乾燥期間を短縮し品質を保持する落花生乾燥技術について

流通加工研究室

蕪野 有貴

落花生生産の作業の省力化・軽労化を図るためには、播種、収穫、脱莢及び乾燥工程の機械化一貫体系の構築が必要です。このうち、乾燥工程において、試作したパレット対応乾燥装置を使用して、ぼち積み作業を省略して乾燥期間を短縮する機械乾燥技術をご紹介します。品質は、従来の乾燥方法の落花生と比べて遜色の無い食味を確保することができます。



落花生のパレット対応乾燥装置

休憩（10:30～10:45）

【特集】限られた水稲育苗施設の有効利用技術 ―台風被害を乗り切るために―
（発表3～5）

発表3 成果発表（10:45～11:10）

育苗ハウスを使わずに省力的な苗づくり

―露地プールを用いた「コシヒカリ」の稚苗育成技術―

水稲温暖化対策研究室 鈴木 聡史

露地プール育苗は、育苗ハウスを用いない育苗技術です。水を張ったプールを用いて露地で育苗管理するため、従来の育苗における灌水作業の省力化が可能です。「コシヒカリ」稚苗を育成する場合、3月26日～4月1日に播種し、ポリプロピレン製不織布2枚がけで露地プール育苗を行うと、4月20～25日に移植可能な稚苗を育成できます。ここでは、実際に行う際の方法や注意点について、試験結果と併せてご紹介します。



露地プール育苗の様子

発表4 成果発表（11:10～11:35）

疎植栽培で収量と玄米品質を低下させないためには品種特性を知ることが必要

―「ふさこがね」で疎植栽培を行う場合―

水稲温暖化対策研究室 太田 和也

使用する育苗箱数を削減できる疎植栽培は、育苗や移植作業の省力・低コスト化を図ることができるとともに、育苗施設の面積が限られている場合にも有効な技術です。しかしながら、栽培条件によっては収量や玄米品質が低下しやすいことが明らかになりました。千葉県的主要うるち品種について疎植栽培への適応性を試験した結果に基づき、「ふさこがね」について収量と玄米品質を低下させないためのポイントを解説します。



「ふさこがね」の疎植栽培

発表5 情報提供 (11:35~11:55)

育苗の変更により移植時期が遅れる場合の本田栽培の留意点

—栽培管理支援システムによる作付け計画の策定と晩植「コシヒカリ」栽培の注意点—

水稲温暖化対策研究室 望月 篤

台風の被災等により十分な育苗ハウスが確保できないため、ハウスの回転数を増やし、通常と異なる時期に移植する場合、栽培管理支援システムを使うことで移植期ごとの管理・収穫適期を把握し、作付け計画を立てることができません。また、「コシヒカリ」の遅い植え付けでは、倒伏しやすくなるので、慣行よりも基肥を減らし、坪 50~55 株植で栽培する必要があります。



晩植えのため倒伏した
「コシヒカリ」

休憩 (11:55~13:00)

発表6 成果発表 (13:00~13:25)

温暖化が水稲に及ぼす影響

水稲温暖化対策研究室 望月 篤

近年、水稲の栽培期間中の気温が高まっており、生育前半の過繁茂、籾数の増加、稈の伸長等の傾向が認められます。このことが、倒伏を助長し、収量を不安定化させる要因となっています。また、籾数の増加や登熟期間中の高温は玄米外観品質を低下させる要因となります。特に「コシヒカリ」は近年の栽培環境では安定生産を行うための栽培が難しくなっています。安定生産のためには、中干しの実施や適切な追肥等の栽培技術が有効です。



水稲の高温登熟障害

発表7 成果発表 (13:25~13:50)

新しい防護柵「集落柵」で集落のイノシシ被害を減らそう

生産環境研究室 松村 広貴

近年、集落柵という新しい防護柵の設置が増えてきました。集落柵は農地だけでなく家屋や道路等も守るため、農地だけを守る慣行の防護柵より効果が劣る可能性があります。そこで、集落柵のイノシシ被害軽減効果を慣行の防護柵と比較検証したところ、集落柵の方が効果が高いことが明らかになりました。また、農地に限らず集落全体のイノシシ出没が減少する利点がありました。集落柵の被害軽減効果と利用上の注意についてご紹介します。



山沿いに設置された集落柵

発表8 成果発表 (13:50~14:15)

イネクロカメムシの生態と効果的な箱施用剤

病理昆虫研究室 武田 藍

近年、県南部の水田でイネクロカメムシの吸汁により生育の抑制や白穂の発生がみられ、収量が減少する被害が多発しています。そこで、本種の水田への飛来時期や水田内における発生状況などの基本的な生態を明らかにしました。また、省力的な防除方法として苗箱施用剤に着目し、本田への移植後、イネクロカメムシの飛来まで残効を保持する苗箱施用剤を選定しました。



イネクロカメムシ

発表 9 成果発表 (14:15~14:35)

イネばか苗病の防除対策 –健全種子の生産に協力ください–

病理昆虫研究室 福田 寛

イネばか苗病は近年多発傾向にあり、種子生産の上で大きな問題となっています。そこで、本病に対する有効薬剤や、その効果的な処理方法について、これまでの試験結果や知見を基にご紹介します。



採種圃でのばか苗病対策

休憩 (14:35~14:50)

発表 10 成果発表 (14:50~15:15)

飼料用米多収品種「アキヒカリ」、「夢あおば」の特性を活かした多収栽培法

水稻温暖化対策研究室 太田 和也

いくつかの飼料用米多収品種※を千葉県の水稲の作型において比較したところ、全ての品種で必ずしも安定して多収が得られるわけではないことが明らかになりました。この試験の中で見いだされた栽培しやすく、多収を確保しやすい品種「アキヒカリ」と「夢あおば」について、飼料として栄養価が高く安定して多収を得ることができ、また、大規模化に対応した省力・低コスト栽培技術を確認したので解説します。(※産地交付金の対象となる品種)



左：「アキヒカリ」 右：「夢あおば」

発表 1 1 成果発表 (15:15~15:40)

WCS 用イネの品種特性を活かした栽培技術

—品種特性を活かした作期分散、堆肥を利用した茎葉型品種の栽培技術—

水田利用研究室 西川 康之

穂重型品種の「夢あおば」、茎葉型の「たちあやか」、「リーフスター」及び「たちすずか」を用いれば、8月上旬から10月上旬まで収穫時期を分散することができます。また、泌乳牛は粳の消化率が低いことから、収量に占める粳の割合が小さい茎葉型品種が主力となってきています。そこで、茎葉型の3品種の副資材入り牛ふん堆肥連用水田における栽培技術、さらに、採種が難しい「たちあやか」及び「たちすずか」の採種栽培技術をご紹介します。



左：「たちすずか」 右：「たちあやか」

発表 1 2 成果発表 (15:40~16:05)

倒伏に強く、多収で大粒の水稻良食味晩生品種「粒すけ」の育成

水田利用研究室 林 玲子

本県水稻の主力品種「コシヒカリ」は耐倒伏性が弱く、収穫期の台風や長雨で倒伏の発生が問題となっています。そこで、「コシヒカリ」並みの晩生で、倒伏に強く、多収で大粒、良食味な新品種「粒すけ」を育成しました。令和2年から一般栽培が開始される「粒すけ」の品種特性をご紹介します。



粒すけ (左) とコシヒカリ (右)
の粳及び玄米の比較

発表 1 3 情報提供 (16:05~16:25)

水稻新品種「粒すけ」の優れた食味・品質を活かすための栽培法

水田利用研究室 西川 英輝

近年、収穫時期を中心とした天候不順による倒伏が、作業効率の低下や収穫不能などの大きな問題となっております。令和2年度から一般栽培が開始される、千葉県の新しい水稻品種「粒すけ」は、「コシヒカリ」と同じ収穫時期で、大粒で収量性に優れ、倒れにくいいため、安定的な生産が望めます。「粒すけ」の高品質で良食味な特性を維持しつつ、多収性を発揮させるための、基肥窒素量や穂肥の施用方法などの栽培法についての情報を提供します。



左：「粒すけ」 右：「コシヒカリ」